

唯識無境と相違識相智について

菊地 哲

撰大乘論の第二章第十四節において、唯識無境を知るために菩薩が備えていなければならない四種の智というものが、説かれている。その四種の智というものを、玄奘訳に従って具体的にあげてみると、(1)相違識相智、(2)無所縁識現可得智、(3)応離功用無顛倒智、(4)三種勝智隨轉妙智、の以上四種である。今回の発表では、これら四種の智の中で最も有名でまた私が重要であると考えている第一の相違識相智と唯識無境との関係について、論じてみた。

ところで、相違識相智の意味を簡単に説明すると、同一の事物であってもそれを見る者が異なれば、それぞれの生存形態や能力、主観等の違いに応じて、その事物は異なったものに見えることがある(例えば人間が水と見るものを魚は自己の住居、餓鬼は膿、天人は虚空と見るが如し)ということを根拠にして、事物の固定的、実体的な実在性を否定して、唯識無境を説くのである。

この譬えは、一水四見と呼ばれている譬えであり、唯識論書において唯識無境を証明するために頻繁に出される非常に有名な譬えである。この一水四見の譬えにおいて重要なことは、四者各々が自分にとって都合のいいものとして水を見ているということである。つまり、自分の主観や偏見等によって自分にとって都合のいい言わば「自分にとっての水」というものが、見られているに過ぎないということである。自分の執着や偏見、あるいは分別によって勝手に形作られた「虚像」あるいは「イメージ」というよ

うなものが、そこに現し出されているにすぎないということ、この一水四見の譬えによって唯識論者達は説こうとしているのである。

そのような虚像が現れることを唯識仏教では「顕現する」という言葉で表す。それは例えば、上記の撰大乘論第二章第十四節の冒頭において「対象が顕現しているにもかかわらず、(それが)実在しているのではない」ということを、如何にして知るのか。世尊は次のように述べておられる。つまり、「菩薩に四つの性質(四種の智)が備わる時、一切の諸現象である(外界の)対象物は、実在しないということを理解するのである」と。と無着によって説かれていることによっても分かる様に、唯識論者達が「顕現する」ということと「実在する」ということを、はっきり区別して説いていることに注意しなければならない。よって、相違識相智(一水四見)によって説かれている唯識無境ということを知るには、この「顕現する」ということと、「実在する」ということには如何なる違いがあるのかということ、はつきりさせなければならないということになる。

ところで、撰大乘論の第二章の世親の中で、この顕現するという言葉について世親が「顕現するとは、対象物として認識することである。」と注釈していて、これによって顕現するということの最も基本的な性格を一言で言えば、それは「認識」であるということが分る。従って、顕現するとは外界の対象物が私によって認識されるということであり、それをもう少し分かり易く言えば、私によって様々なものが見られたり、聞かれたり、知られたりするということであり、更に言えば対象物というものを介してそこに私という自分を中心にした世界が、開かれてくるということ

とである。つまり、対象物が私という自分の世界に引き込まれ、そこに「自分にとつての」対象物という一つのイメージが出来上がる。しかし、それは「自分にとつて」という主観が入っているため、それによって真の姿が現し出されているのではないのである。それが、先程の一水四見の譬えのところで述べた四者各自の自分にとつて都合のいい「自分にとつての水」という虚像なのである。世親は、撰大乘論第二章第三節の世親釈において唯識三性説との兼ね合いで、その「自分にとつての対象物」が現れるということを「我」というものの対象物が顕現している。」という独自の表現を用いて述べている。しかしそれは、我々の執着や偏見、分別によって勝手に形作られた虚像であり真の意味で実在しているものではなく、三性説においては遍計所執性という凡夫の迷いの世界に属するものである。

それでは、顕現とは異なる唯識思想における真の意味での実在とは何であるのか。世親は、撰大乘論第二章第四節の世親釈において円成実性について述べる箇所です。「すなわち我として顕現することが全くなくなるといふことは、無我なるものだけが実在するものとなつていふことである。」と注釈している。つまり、外界の対象物とそれを見る自分(客観と主観)という二元的な意識がなくなつた時、そこに現れる境地というものは境識俱泯という外界と自分との区別がなくなつた状態である。その境識俱泯(所取、能取の無)という状態を唯識説では「唯識性」と呼ぶが、三性説の立場から言えば、それは円成実性に他ならず、それが唯識における「顕現」とは異なる究極的な「真実」なのである。それを世親が、「無我なるものだけが実在するものとなつていふことである。」と注釈しているのである。そしてそれが、唯

識説における「無の有」という真の意味での実在なのであり、円成実性という仏の世界に属するものである。

以上述べてきた相違識相智あるいは一水四見によつて説かれていた唯識無境ということを実代風に当てはめてみると、我々は常に外界というものを自分中心に見ているということである。つまり、我々はいつも色眼鏡をかけて外界を自分の都合のいいものとして見て、自分と外界というものを分け隔てているが、そういう色眼鏡をはずして外界を見ていくべきであり、自分と外界とは一体なのだということを、無着はこの相違識相智や一水四見の譬えによつて、説かんとしているのである。